

戦略的互惠関係の安定した発展を目指す  
中日国交正常化35周年記念シンポジウム  
中国社会科学院日本研究所  
2007年9月7日 - 9日  
中国北京・九華山荘

基調講演

戦略的互惠関係と日中共通の未来

猪口邦子

Kuniko INOBUCHI, Ph.D.

衆議院議員

日本学術会議会員

元国務大臣

(はじめに)

主催者の先生方、大使閣下、来賓の皆様、尊敬申し上げる専門家の先生方。  
本日はこの重要な大会にて基調講演の機会に恵まれたことは光栄であり、深く感謝  
申し上げます。この有意義な企画をされたことに対し、日本と中国の戦略的互惠関係  
の順調な発展を願う一人として、関係の先生方の先見性に心からの敬意を表したい。

日中の戦略的互惠関係について述べる前に、私の中国との関わりにつき若干触れて  
みたい。私は長年、国際政治学を専攻する大学教授として東アジアの平和と日中関  
係強化に強い関心を寄せ、研究者としても何度か訪中し、私の著作のうち、初期の  
『ポスト覇権システムと日本選択』(筑摩書房)や、国際政治学の理論書である『戦  
争と平和』(東京大学出版会)などは光栄なことに中国語にも訳出されている。中国  
の学者や学生たちとの知的対話は、私の学術活動にとって一貫して重要なものであ  
った。また私は2002年から2004年までジュネーブにて軍縮会議日本政府代  
表部特命全権大使を務め、多国間軍縮外交の先端で積極的に活動する立場となっ  
たが、そのときも中国当局は **multilateralism** (多国間主義) を重視する大国として、  
有意義な外交的協力を現場の大使や政府代表同士で築くことを可能にしてくれた。

そのような長年にわたる経験から、2005年に国会議員になってからも日中関係

を特別に重視してきた。昨年秋まで、初代の少子化・男女共同参画担当の国務大臣を務めたが、2006年7月に東京で東アジア・ジェンダ-平等閣僚会議を開催し、中国からも閣僚級の参加を得ることができたので、日中韓3カ国の閣僚級会合も併せて主催した。同会合は、同じ東アジアの文化のなかで、女性の社会進出を促進する際の苦労や方法を互いに共感をもって意見交換する有意義なものとなった。広範に各分野において政治のハイレベルの日中政策対話を推進することは、私が大臣として目指したひとつの理念であった。

#### (日中与党政策対話プロセスの構築)

その後、私は与党自民党の幹事長外交補佐としてまた自民党の国際局長代理として日中与党協議のプロセスを強化することに最大の努力を傾けることになった。その時期は日中与党間政策対話プロセスが一気に発展した時期と重なり、安倍晋三総理がリードした政府間プロセスと中川秀直前自民党幹事長がリードした与党間プロセスは相乗効果をもたらすことになる。政府間では、昨年10月8日-9日の安倍晋三総理の中国公式訪問によって戦略的互惠関係を構築する方向でいわゆる氷を割る努力がなされ、また4月11日-13日の温家宝国务院総理の日本への公賓としての公式訪問とその国会演説は、流氷を溶かす努力と称される画期的なものになった。日中与党間政策対話プロセスは、政府間プロセスを補完し、フォローアップし、また政府の外交が順調に進むための知的環境を政治的に整えるものとして機能するよう設計された。

具体的には、安部総理訪中直後の10月16日-17日、東京と御殿場で第2回日本・中国与党交流協議会が日本側団長は中川秀直前自民党幹事長、中国側団長は王家瑞中国共産党対外連絡部(中連部)部長として行われ、私も経済界等と会合の議長を務めるなど、中連部が日本で幅広い交流を行えるよう努力した。今年に入ってから3月15日-19日の日程で与党幹事長訪中が行われ、中川秀直前自民党幹事長の訪中に、竹下亘衆議院議員と共に私も随行し、すべての会談を補佐した。とりわけ、3月16日午後、人民大会堂にて1時間半近くの時間をかけて行われた胡錦濤国家主席との会談にては、戦略的互惠関係を構成するプロセスや要素についての知的対話が進み、政府間では必ずしも余裕がないかもしれない日中関係のマクロのビジョンや中長期の方向性について、互いの考えや関心内容を理解し合い、共感や信頼感が広がる流れを作り、個々の政策についての政府間協議が進みやすい政治環境を整えるという与党外交の真骨頂を実現することができたと考える。同様のことが、釣魚台で行われた唐家璇國務委員との会談、共産党対外連絡部にて行われた王家瑞中連部長との会談、また中央党校で行われた中国各地各界からの参加者との意見交換についても言えよう。3月に行われたこの与党幹事長訪中は、まさに4

月の温家宝総理訪日の政治環境を整える役割も果たし、日中の建設的な未来志向を政治的に不可逆なものにする役割を担ったと感じる。

（戦略的互惠関係とは）

戦略的互惠関係の概念は、このように昨年10月から築かれてきた未来志向の政府・与党プロセスの根幹を成すものであり、合理的、実践的、実利的、多角的、長期的、そして知的なものである。日中両国は将来にわたり、二国間、地域内、国際社会などさまざまな関係性のレベルにおける互惠協力を広く発展させ、そのなかで互いにそれぞれの懸案事項を解決しつつ共通利益を拡大し、さらに国際社会の安定や発展に建設的に関わることを含む広範な概念である。外交では個別の問題を断片的に捉えるとゼロサム的になりがちだが、日中はいずれも大国であるがゆえに多様かつ複雑な各種の課題を抱えているため、互いに協調し、配慮をし合い、場合によってはギブ・アンド・テークの複雑な計算を広範な課題群のなかで行う余地もむしろ発見できよう。また大国であるがゆえに、他の国にはめったにない能力や対応力によって決定的な形で相手を助けることもできよう。さらに日中が一つの声で語れば、とりわけ両国関係や東アジアの問題については、世界はその声を尊重するであろう。つまり共に熟慮を重ねて共同歩調をとることができれば、日中両国の世界政治への影響力を強化することにも繋がっていく。アジアは長い間、世界史のなかで遅れた地域として認識されてきたが、日中が建設的に互惠の精神と政治戦略で協力し合えば、そのような偏見を21世紀には払拭してアジア新時代の希望を世界に与えることも可能である。

（戦略的互惠と心の和解）

戦略的互惠関係を発展させていくには、まずは相互の信頼を高めなければならない。そのためには、行為の相互予測可能性を高めることは基本であり、緊密な連絡や報告が常に必要であり、また国力についての透明性を高める必要もあろう。その観点からも8月末の日中防衛相会談や防衛交流は重要な一歩である。

また大規模な国民交流を通じて共通の未来を直感できるものとしていく市民参加型の日中友好への努力は貴重である。日本側では御手洗富士夫経団連会長はじめ、森喜朗元総理や二階俊博自民党総務会長らの主導する日中国交正常化35周年記念の2007「文化・スポーツ交流年」各種行事は、両国民から支持されて成功裡に推進されつつあり、2万人交流計画はすでに3万人規模に発展する勢いである。

そのような未来志向は、同時に歴史と向き合い、歴史認識を深める努力と一体のものでなければならず、そのなかで、日本には歴史の負債に対して意識を深める誠意

が期待され、他方で中国には戦後の日本が平和国家としての誠実な歩みを続けてきたことを受け止める視野の広さが期待されている。日中間の国民レベルの心の和解は、政治レベルの戦略的互惠という共通の未来への行動原理と一対のものであり、その基層を成すものであると考える。

（成功事例の積み重ね）

戦略的互惠関係には包括的で長期的という面があるが、その発展には、目下の懸案事項の解決能力が向上したことを双方が実感できるような具体的な成功例を積み重ねることが肝要である。その意味で、東シナ海資源開発問題について行われきた事務レベルの努力が、双方が受け入れ可能な比較的広い海域においての共同開発の実施が、早期に成果をもたらすことは重要である。個別の成功事例を共有することは、両国政府と国民に自信を与える契機となり、成功事例から生まれる肯定感こそが国際関係においては共通の未来を構築する政治的エネルギーの源となる。

また日中両国は大国同士であるため、国際社会のなかで大役を果たす政治的、社会的機会が少なくなく、その一つ一つが成功するよう戦略的互惠の精神と対応力を発揮し、それぞれの世界的な役割が成功するよう助け合い、成功事例の積み上げをしていくことも戦略的互惠関係に弾みをつけることになる。2008年はその意味で、中国は北京オリンピックの開催国であり、日本はG8サミット（先進国首脳会議）議長国であり、双方が格別に重要な世界的役割を果たす年であるため、それぞれのリードアップ・プロセスを含め、「2008年の東アジアの二重の成功」を確実にするよう協力し合うべきである。

（互いの向上を脅威と捉えない）

貧困で遅れた地域として認識されてきたアジアは、今日では自立と成長の地域としての魅力と注目を集めるようになった。日本は天然資源が乏しいという不利な経済条件を克服して他のアジアに先駆けて経済成長を遂げ、政府開発援助や技術移転などを通じ、中国をはじめアジア各国が成長への契機をつかめるよう努力し、そのような政策は日本の納税者の強い支持を数十年にわたって得てきた。そのことは日本の政府と国民のささやかな誇りである。今日、中国の成長は目覚しいが、そのことについて、日本の政府・与党はステレオタイプの中国脅威論に陥るのではなく、中国の経済成長は脅威ではなく、歓迎すべきチャンスであると考えている。

他方で現在、日本は国際社会でより大きな政治的役割を担いたいと感じている。国連安全保障理事会常任理事国入りを国民が求めているのは、まさにそのような国民感情を反映している。日本が戦後、敗戦国という不名誉な出発から政治も経済もや

り直し、誠実に平和国家としての歩みを揺ぎなく続け、アジアの発展を助け、よき隣人であろうと努力してきたその現代史を、国際社会が、とりわけ隣国が認めてくれることを願っている。中国の経済大国化が日本にとって脅威ではないのと同様に、日本の政治的大国化は、決して中国にとって脅威ではない。そのような認識を戦略的互惠の知的文脈において是非深めてもらいたい。その意味で、温家宝総理の訪日時の国会演説は静かな転換点の光をもたらすものと、私は衆議院本会議場で聞きながら感じた。「中国側は、日本が国際社会においてより大きな役割を果たしたい願望を理解し、国連改革を含む重要な国際問題と地域問題について、日本側と対話と意思疎通を強化する用意があります」と温総理は4月12日、そのくだりを特別の力をこめて述べてくれたのである。

アジアの国同士として、日中両国が互いの向上を脅威ととらえて牽制するより、win-win の精神で、互いに認め合い、むしろ互いの成長を助けることで、アジアの世界における声や立場を強化し、互いのパワーの向上の相乗効果によってアジアの他の諸国も助けるようにしてはどうであろうか。

(公正な仲介者-honest broker へ)

日中はそれぞれ個別の懸案事項を有している。そのなかには、相手が honest broker(公正な仲介者)になってくれることによって解決することもある。戦略的互惠の精神にはそのような方法論も含まれる可能性がある。その役割を演じてくれたことについて、国民は未永く感謝の念を抱くであろう。すでに中国は北朝鮮の問題ついて六者協議の議長国の役割を巧みに果たし、核不拡散は許さず、また拉致被害者を救済したいという日本の思いに配慮した交渉を試みている。日本の国連安保理常任理事国入りについても、そのような役割を果たしてくれる日が来ることを私は一人の政治家として、また研究者として信じている。

(非核の旗手こそ国連安保理常任理事国に)

国連機関の改革の中核を成す概念は、バランスと多様性である。効率強化など行財政改革も重要であるが、国連安保理のよう中核機関の改革には政治的バランスと多様性が不可欠であり、国連では一般的にそれを地理的地域によって確保しようとする。しかし安保理の特徴は P5 が全員、核兵器保有の軍事大国であるところにある。世界の安全保障の責任を果たすにはその画一性はやむをえないと考えられていた時代があったのかもしれないが、そのような機関の改革を志すならば、地域的なバランスより、非核という機能的バランスを考えるのが 21 世紀の知的文脈には相応しい。広島・長崎の悲劇を国民社会全体が今も深く抱きしめ、1990年代半ばから一貫して国連総会にて核廃絶決議案を提出し、近年では圧倒的多数の支持を得て採

択を実現してきた日本こそは、非核の旗手であり、その国こそ率先して安保理改革で常任理事国入りを果たすべきであろう。そのような知的・政治的環境を、多国籍主義の旗手として活躍してきた隣国の中国こそがまさに honest broker として整えるくれることを私としては戦略的互惠関係の活用形として願いたい。その際、テロとの戦いで大量破壊兵器の軍縮不拡散を重視する米国との共同作業も可能であろう。それは政治が過去から未来への転換を指導する手本を示すという意味で、日本国民のみならず世界に希望を与える両大国に相応しい大振りの米中共同作業となるであろう。

他方で日本も、中国が困っていることについて、たとえば環境問題への対処や方法について日本のみならず世界の英知と技術を仲介できるよう努力するなど、中国の要望に基づき積極対応すべきである。

#### ( Geriatric Peace 高齢化社会の不戦構造 )

最後に、国際政治学者として少子化担当大臣を務めるなかで、少子高齢化と平和との関係性について考えてきた。民主主義国の場合、高齢化によって高齢者のための社会保障費や少子化対策費を拡大する必要性が高まるため、それが防衛費抑制要因ともなり、21世紀には高齢化社会不戦構造 ( Geriatric Peace ) が出現してくると思われる。日本や EU ( 欧州連合 ) 諸国はその時代を先取りしつつあるのかもしれない。かつての経済学の教科書には、バターか大砲か ( butter or gun ) として民需か軍需かの予算配分の相克を論じたが、少子高齢化社会では、医療か大砲か ( medicine or gun ) の選択になっていくであろう。

高齢化社会不戦構造の時代には、国家間の問題解決手法としてかつてない水準で外交や交渉の手法が向上すると考えられる。まさに戦略的互惠関係はそのような高度な平和と発展のための知略の時代を象徴するのかもしれない。知的にも外交的にも、日中戦略的互惠関係は可能性の宝庫である。実績の宝庫となるかは、今後の日中の積極的な政治的リーダーシップに拠る。(了)

**Contact information: Kuniko INOBUCHI, Ph.D.**

**Room 541, First Members' Office, House of Representatives**

**Phone +813-3508-7271 Fax +813-3508-3130**